

「馬」のお話 (バロン西とウラヌス号)

校長 松本 雅史

いよいよ2学期も最後の週となりました。来週の月曜日は終業式です。2学期のはじめに、こんな2学期にしたいとそれぞれが目標を立てたことと思います。その思いは達成されていますか。最後の1週間をどう過ごすかよく考えて、一日一日を大切にしてくださいと思います。

今朝は、始めに表彰を行います。

今日の表彰の中に乗馬の表彰がありました。佐藤さんは、乗馬を習っています。実は、以前、佐藤さんから、「ぜひ全校朝会で馬の話をしてください」とお願いされました。私は、「では、佐藤さんが乗馬で表彰されることがあったらその時にお話しましょう」と約束しました。今日は、その約束を果たしたいと思います。

皆さんは、「乗馬」といっても身近でない人がほとんどなのではないでしょうか。この「乗馬」は、オリンピックの正式種目にもなっています。「馬術」といいます。今朝は、このオリンピックの馬術史上、日本で唯一金メダルをとった人のことを皆さんにご紹介したいと思います。

今から90年以上前の太平洋戦争前の話です。1932年のロサンゼルスオリンピックで、大会最終日の馬術大障害飛越個人に出場した、当時陸軍中尉だった西竹一さんが、愛馬「ウラヌス」とともに見事優勝し金メダルを獲得しました。その時の喜びを当時の新聞の見出しでは、

「天晴れ西中尉、正に天空を行く、花々し若武者の神技」

と伝えています。戦争前の日本では、まだ華族といって、身分制度が残っていました。西さんは「男爵」の家柄でした。男爵のことを英語で「バロン」といいます。西さんは「バロン西」の愛称で呼ばれました。当時のスポーツは、上



流階級の楽しみというイメージが強く、その中でも優雅さのひとときを目立つ馬術は、最も人気の高い「花形」種目でした。そのため、馬術は大観衆のメインスタジアムで最終種目として行われ、そこで勝利した西中尉の華麗な姿には人々から惜しめない拍手がおくられました。ロサンゼルス市議会は、前例のない東洋人の快挙として、西中尉に名誉市民の称号を贈りました。「容姿端麗」「明るい性格」と、いかにも男爵家育ちといった天真爛漫な人柄は、誰からも愛され、アメリカやヨーロッパでも人気を得たといいます。



そんな、彼を時代の嵐が襲います。太平洋戦争です。彼は、陸軍中佐になっていました。中佐ですから、1つの連隊の指揮官です。太平洋戦争が終わる1年前、1944年6月に西中佐は、小笠原諸島の硫黄島に派遣されます。そして、遂に1945年2月から3月にかけて、硫黄島を戦場にした日本軍とアメリカ軍の戦いが始まります。硫黄島守備隊2万1000人に対して、アメリカ軍は6万1000人と兵力差は歴然でした。1ヶ月にもわたり粘り強

く戦いましたが、最後は全滅してしまいました。

攻撃したアメリカ軍は、この硫黄島にかつてロサンゼルスで見事な馬術を披露した「バロン西」がいることを知っていたといいます。「バロン西」を惜しんで、「バロン西、出てきなさい。あなたはロサンゼルスで限りない名誉を受けた。降伏は恥ではない。我々は勇戦したあなたを尊敬をもって迎える。世界は君を失うにはあまりに惜しい」と連日呼びかけましたが、西中佐は黙ってこれに応じなかったというエピソードが残っています。この逸話は、「硫黄島からの手紙」という映画のひとシーンにもなっています。真偽のほどはわかりませんが、そうした逸話が残るほど、西竹一さんは、敵であるアメリカの人たちからも愛されたのだと感じます。そして、馬を愛する心には、敵も味方も国の違いもないのだと改めて思います。

西中佐が戦死し、硫黄島がアメリカ軍に落ちたという知らせが本土に届いてから1週間ほどたったとき、オリンピックで共に戦った愛馬「ウラヌス」が後を追うように亡くなります。西中佐は、硫黄島に行く前にウラヌスと最後のお別れをしています。ウラヌスは主人との対面に嬉しそうに体を摺り寄せてきたそうです。西中佐は、たてがみを数本切り取って、大切に戦場にもって行ったといいます。



今朝は、馬を通してお話をしました。最後の1週間、健康で、仲良く、2学期のまとめにふさわしい1日1日にしてまいりましょう。